◎研究論文◎

幼児の主体的な運動遊びを支える保育者の意識と役割

－テキストマイニングを活用した分析から－

初等教育科　木　戸　貴　弘

【要旨】

本研究は、主体的な学びと運動遊びを関連づけ、幼児の主体的な運動遊びを支えるために必要な保育者の意識と役割をアンケート調査および自由記述式の回答から検討した。運動遊びを計画・実践する際、子どもの主体的な学びを意識しているかどうかについて、少なからず意識している保育者は73名（86.9%）となった。幼児の主体的な運動遊びを支えるために必要な保育者の役割についてテキストマイニングを活用し分析した結果、頻出語として本研究のキーワードとなる語や肯定的な感覚を示す語、子どもの心情に関する語が抽出された。また、共起関係の程度および共起ネットワークの関係性により、①子どもや保育者自身が楽しむことのできる運動遊び。②子どもがやってみたいと思えるような環境の設定。③年上（の子）の姿を見る時間を設け、楽しく体を動かす。④子ども自身が興味を持つことや子どもの気持ちを大切にする。⑤子どもへの声かけや成功体験（経験）を大切にする。⑥子ども同士が考える時間を作る。これら６つのカテゴリーに概括することができた。

１．緒言

平成29年に告示された幼稚園教育要領（以下.教育要領）の改定における基本理念[1]の中で、子どもが「どのように学ぶか」という本質として「主体的･対話的で深い学び」を重視している。この「主体」という言葉は、平成元年の教育要領の改正以降用いられるようになり現在も引き継がれている。幼稚園教育における「主体的な学び」について中央教育審議会答申[2]では『周囲の環境に興味や関心を持って積極的に働き掛け、見通しをもって粘り強く取り組み、自らの遊びを振り返って、期待を持ちながら、次につなげる「主体的な学び」が実現できているか。』という視点から捉えることを示している。

奈須氏が「幼児はハイパーアクティブラーナー」と述べる[3]ように、幼児教育はこれまでもアクティブ・ラーニングを中心とした主体的な教育が行われている。つまり、教育要領の改定では、これまでの幼児教育における取り組みや価値を明晰に学力だと位置づけたといえる。そのため、改めて幼児教育における主体的な学びについて見直すことは大変意義のあることである。

保育の活動の中には様々な遊びが存在する。その一つとして運動遊びがある。運動遊びについては、領域「健康」[4][5][6]のなかで、ねらいとして「（２）自分の体を十分に動かし、進んで運動しようとする。」、内容として「（２）いろいろな遊びの中で十分に体を動かす。」、「（３）進んで戸外で遊ぶ。」と記されており、

幼児の運動遊びは心身の健全な発育発達のみならず、物事に取り組む積極的な態度や意欲を育み、その後の人生を豊かに生きるための基礎を作る重要なものと考えられる。日頃から保育者は幼児個々の発育発達や興味関心を考慮し、主体的な運動遊びを引き出す環境を整え、充実した遊びを展開するための指導援助を行なっていく。そのため、保育者の運動遊びの捉え方や関わり方が活動の内容や展開に大きく影響することが考えられる。

そこで本研究では、主体的な学びと運動遊びを関連づけ、幼児の主体的な運動遊びを支えるために必要な保育者の意識と役割をアンケート調査および自由記述式の回答から検討し、概括することを目的とする。

２．研究方法

（１）対象者

本研究の対象者は、平成31年度大分市保育所等職員研修「運動遊び」に参加した保育者に対し、研修終了後にアンケート調査の目的、内容を説明した後、同意を得て回答を得た84名とした。なお、集計結果および記述内容の分析、研究への利用および論文執筆等の許可を得た。

対象者の性別、勤務先、保育・教育歴、担当クラスの年齢を以下の表に示す。

表１　対象者の性別

性別	人数	割合
男性	8	9.5%
女性	76	90.5%
合計	84	100.0%

表２　対象者の勤務先

勤務場所	人数	割合
幼稚園	4	4.8%
保育所	59	70.2%
認定こども園	21	25.0%
合計	84	100.0%

表３　対象者の保育・教育歴

勤務年数	人数	割合	勤務年数	人数	割合
1年目	9	10.7%	14年目	2	2.4%
2年目	20	23.8%	15年目	1	1.2%
3年目	10	11.9%	16年目	1	1.2%
4年目	7	8.3%	17年目	1	1.2%
5年目	6	7.1%	18年目	2	2.4%
6年目	4	4.8%	19年目	0	0.0%
7年目	3	3.6%	20年目	1	1.2%
8年目	2	2.4%	21年目	1	1.2%
9年目	5	6.0%	22年目	0	0.0%
10年目	1	1.2%	23年目	0	0.0%
11年目	3	3.6%	24年目	1	1.2%
12年目	1	1.2%	25年目	0	0.0%
13年目	2	2.4%	26年目	1	1.2%

表４　対象者の担当クラスの年齢

担当	人数	割合
0歳児	7	8.3%
1歳児	10	11.9%
2歳児	18	21.4%
3歳児（年少）	13	15.5%
4歳児（年中）	6	7.1%
5歳児（年長）	14	16.7%
その他	16	19.0%
合計	84	100.0%

（２）調査日

2019年11月５日に実施した。

（３）質問内容

①運動遊びを計画・実践する際、子どもの主体的な学びを意識しているかどうかについて、４段階の順序尺度を用いて回答を得た。②主体的な運動遊びを支えるために大切だと思うことについて、自由記述式による回答を得た。なお、回答は無記名で行なった。

（４）分析方法

自由記述は、分析者の恣意的な解釈を排除し、

客観的かつ全体的な傾向を把握するため、KHCoderを用いてテキストマイニングによる分析を実施した。テキストファイルの各行に１文ずつ入力した自由記述から、自動的に語の抽出およびそれらの語の共起ネットワークを作成し共起関係を探った。

３．結果と考察

（１）主体的な運動遊びに対する意識

運動遊びを計画・実践する際、子どもの主体的な学びを意識しているかどうかについて調査した結果を表５に示す。

表５　子どもの主体的な運動遊びに対する意識

項目	人数	割合
意識している	15	17.9%
ある程度意識している	58	69.0%
あまり意識していない	10	11.9%
意識していない	1	1.2%
合計	84	100.0%

表５より、意識している15名（17.9％）、ある程度意識している58名（69.0％）、あまり意識していない10名（11.9％）、意識していない１名（1.2％）となった。主体的な学びを意識しているという点において少なからず意識している保育者は、意識しているとある程度意識しているの回答者を合計した73名（86.9％）となった。この数値が高い値を示しているのか低い値を示しているのかについては検討をさらに進めていく必要はあるが、全ての保育者が意識しているという結果にはならなかった。その要因として、本研究では運動遊びとの関連を強く結びつけたからであると示唆する。運動遊びの指導には、技術指導を伴う場合もあり保育者の中には運動に対して苦手意識を持っている場合や、保育者自身が運動遊びの経験が少ない場合もある。さらに、保育士等に関係する資料[7]によると、全国調査において保育士の構成比は男性5.4％、女性94.6％。幼稚園教諭の構成比は男性4.5％、女性95.5％となっており、いずれの場合も女性が９割以上を占めており、本研究の対象者も同様の割合を示している。先にも述べたように、保育者自身の運動遊びに対する意識や経験が子どもへの主体的な運動遊びにおける指導援助の意識にも繋がったのではないかと示唆される。また、吉田・岩崎（2012）が行なった調査[8]では、公立園においては幼稚園教員以外の運動指導者はほとんどいないが私立園には約７割の運動指導者がいると報告しており、そのうち74.4％が外部からの派遣による運動指導者であったと報告している。この報告にあるように、現在は外部からの運動指導者による運動遊びの指導も少なくない。そのため、本研究の対象者に対しても同様の調査を行なうとともに、保育者の日頃の運動遊びへの関わりやその指導援助の方法などをより深く調査していく必要がある。そのことが、子どもの主体的な運動遊びに対する保育者の意識の差の背景にある要因を探っていく上で有効であると考えられる。

（２）主体的な運動遊びを支える保育者の役割

自由記述の回答からテキストファイルの各行に１文ずつ入力し、自動的に語の抽出およびそれらの語の共起ネットワークを作成し共起関係を探った。なお、分析の前処理として、同意語、類義語の整理を行ない、以下の語を統一の語として本研究では取り扱った。

表６　同意語・類義語の整理

同意語・類義語	統一の語
身体・体	体
声かけ・声掛け・言葉かけ・呼びかけ	声かけ
子・子ども・子供	子ども
保育者・保育士・先生・保育教諭	保育者

1）頻出語の抽出

助詞や助動詞などの一般的な語は除外され、すべての名詞、動詞、形容詞が抽出された。分析対象となった文は133文、総抽出語は延べ774語であった。頻度分析のうち４回以上出現した単語上位30語までを表７に示す。

表７　自由記述における頻出語及び出現頻度

順位	抽出語	出現回数	順位	抽出語	出現回数
1	子ども	80	18	考える	7
2	運動遊び	36	18	取り入れる	7
3	保育者	33	18	同士	7
4	環境	19	21	やってみたい	6
5	声かけ	18	21	やる気	6
6	設定	17	21	見る	6
7	大切	14	24	経験	5
8	思える	13	24	子ども自身	5
9	楽しい	11	24	自身	5
9	楽しむ	11	24	成功	5
9	持つ	11	24	体験	5
12	思う	10	29	感じる	4
13	気持ち	9	29	作る	4
14	意欲	8	29	時間	4
14	興味	8	29	体	4
14	計画	8	29	動かす	4
14	姿	8	29	年上	4
			29	褒める	4

上位の語に着目すると、「子ども（80回）」、「運動遊び（36回）」、「保育者（33回）」が抽出された。これらは本研究の調査内容における主たるキーワードにもなっており、さらに、質問に関して「子どもの主体的な運動遊びを支えるために保育者にとって大切だと思うこと」について回答を求めているため、対象者の回答もその語に準じた形式で記入された可能性が考えられる。また、同様の理由で「大切（14回）」、「思える（13回）」、「思う（10回）」の出現頻度も高くなったと予想される。

「環境（19回）」については、以下に語として抽出されている「設定（17回）」との関連が強いと予想される。コンコーダンスを確認すると、“環境の設定”や上位語には抽出されていないが“環境の構成”といった語とともに使用されていた。これは教育要領[4]の総則に「幼児教育は、学校教育法に規定する目的及び目標を達成するため、幼児期の特性を踏まえ、環境を通して行なうものであることを基本とする。」と示してあるように、幼児教育の根幹をなす考え方であり、日々、子どもと向き合う保育者にとっては通常、強く意識している考え方であると思われる。そのため、上位の抽出語として出現したと考えられる。

「楽しい（11回）」や「楽しむ（11回）」という肯定的な感覚を示す語が高頻度で出現した。これら語のコンコーダンスを確認すると、“子どもが楽しいと思う運動遊び”や“子どもが楽しみながら簡単にできる運動遊び”など子どもの目線に立った記述がみられる一方で、“保育者自身が楽しみながら”や“保育者が楽しむ姿”など保育者目線の記述も多数みられた。子どもの主体的な活動を促す際に保育者は子ども目線に立ち楽しさを味わうことができるような環境設定や環境構成を図るとともに、保育者自身が楽しむ姿を子どもたちに示すことが重要であると考えていることが示唆される。

「気持ち（９回）」、「意欲（８回）」、「やってみたい（６回）」、「やる気（６回）」など子どもの心情に関する語が抽出された。中坪は[9]幼児期の子どもについて、大人から知識や技能を与えられて身に付けるのではなく、子ども自身が自分の欲求に基づきながら、主体的に周囲と関わることが大切であると述べている。幼児期の子どもは心身の発達が未分化な状態にあるため互いが密接な関係にある。運動遊びは身体面の向上を担うため活動としてだけではなく、精神的な側面の発達を促す活動としても位置づけている[10]。そのため、主体的な運動遊びを促す動機付けとして子どもの意欲ややる気、やってみようという心情、気持ちを揺さぶるような関

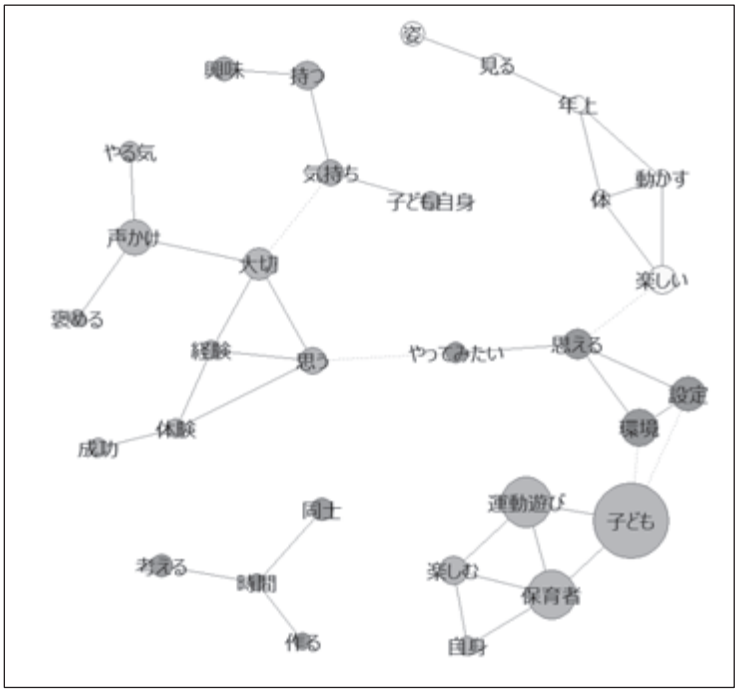

図１　共起ネットワーク

わりが保育者は大切であると考え、抽出語として出現したのではないかと示唆される。

２）共起関係の探索

抽出された頻出語同士がどのような共起関係にあるのかを探ったところ、共起ネットワークは図１のようになった。本研究では共起ネットワークの作成にあたり、抽出語の最小出現数４、共起関係の強さを示すJaccard係数が0.14以上のものを表示するように設定した。なお、円の大きさは出現頻度を示しており、共起関係に応じて語同士が線で結ばれている。

共起関係の程度および共起ネットワークの関係性により、大きく分けて６つのカテゴリーが出現した。幼児の主体的な運動遊びを支えるために大切だと思う保育者の役割として以下のようにまとめることができる。

①子どもや保育者自身が楽しむことのできる運動遊び。

②子どもがやってみたいと思えるような環境の設定。

③年上（の子）の姿を見る時間を設け、楽しく体を動かす。

④子ども自身が興味を持つことや子どもの気持ちを大切にする。

⑤子どもへの声かけや成功体験（経験）を大切にする。

⑥子ども同士が考える時間を作る。

池田[11] は主体的な活動について、保育者は子どもを理解しよく見つめながら、保育者自身も自分の保育に対して主体的に取り組んで行く姿勢を持つことが、子どもたちの主体的な活動につながると述べている。本研究のカテゴリー①にも同様の文言が出現しており、子どもが楽しむだけではなく、保育者も主体的になって楽しむことのできる運動遊びを実施することが結果として子どもの主体的な活動を促すと考えられる。

主体的に活動できる子どもたちが育つ要因として、田甫[12] は異年齢集団での「みて-まねる」学びが日常的に行なわれていることが重要であると述べている。具体的には、子どもは「遊び

の徒弟性」の構造を持っており、保育者の指示を待って活動するのではなく、例えば、年少児が年長児の様子を「みて-まねる」ことを通して学び、主体的な活動につながると報告している。本研究の結果からも、カテゴリー③に“年上の姿を見る時間を設け”とあるように運動遊びにおいても、保育者は先行研究と同様に重要な事項であると考えていることが示唆された。

カテゴリー⑤では保育者の声かけや成功体験に関してまとめられた。子どものやる気を促すような声かけや褒めるような声かけなどの肯定的な声かけについては、子どもの意欲を高め行動力につながると考えられている[13)]。また、成功体験については、小学校段階において運動が苦手な子に対して効果的[14)]であると報告されている。そのため、幼児に対しても同様の効果が得られると考えられるため保育者にとって有効な事項であると示唆された。

カテゴリー⑥に関して、“子ども同士が考える時間を作る”とは、子どもの協同的な学びにつながっていると考えられる。「協同性」という文言については教育要領[4)]において幼児期の終わりまでに育ってほしい10の姿として新たに加えられた。一緒に行なう遊びの具体的な過程を通じて徐々に子どもたち自ら共有した目的が、さらに充実した遊びへの展開をもたらすと示されており、主体的な運動遊びを促す上で“子ども同士が考える時間を作る”ことは保育者にとって重要な役割になると考えられる。

4．結論

本研究では、主体的な学びと運動遊びを関連づけ、幼児の主体的な運動遊びを支えるために必要な保育者の意識と役割をアンケート調査および自由記述式の回答から検討し、概括することを目的とした。

幼児の主体的な運動遊びを支えるために必要な保育者の意識について、運動遊びを計画・実践する際、子どもの主体的な学びを少なからず意識している保育者は、73名（86.9%）となった。本研究の対象者である全ての保育者が意識しているという結果にはならなかった。その要因として、本研究では運動遊びとの関連を強く結びつけたからであると示唆された。運動遊びの指導には、技術指導を伴う場合もあり保育者の中には運動に対して苦手意識を持っている場合や、保育者自身が運動遊びの経験が少ない場合もある。今後、保育者の日頃の運動遊びへの関わりやその指導援助の方法などをより深く調査し、保育者の意識の差の背景にある要因を探っていく必要がある。

幼児の主体的な運動遊びを支えるために必要な保育者の役割について、自由記述の回答から頻出語の抽出および共起ネットワークを作成し共起関係を探った。その結果、頻出語として「子ども」、「運動遊び」、「保育者」など本研究のキーワードとなる語や「楽しい」、「楽しむ」という肯定的な感覚を示す語、「気持ち」、「意欲」、「やってみたい」、「やる気」など子どもの心情に関する語が抽出された。また、共起関係の程度および共起ネットワークの関係性により、①子どもや保育者自身が楽しむことのできる運動遊び。②子どもがやってみたいと思えるような環境の設定。③年上（の子）の姿を見る時間を設け、楽しく体を動かす。④子ども自身が興味を持つことや子どもの気持ちを大切にする。⑤子どもへの声かけや成功体験（経験）を大切にする。⑥子ども同士が考える時間を作る。これら６つのカテゴリーが出現し、主体的な運動遊びを支える保育者の役割として重要であると考えられる。

参考文献・引用文献

１）津金美智子（2017）『平成29年度版 新幼稚園教育要領ポイント総整理 幼稚園』東洋館出版社, pp.84-88

２）文部科学省 中央教育審議会（2016）「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo0/toushin/1380731.htm（2020年１月15日閲覧）
３）津金美智子（2017）『平成29年度版 新幼稚園教育要領ポイント総整理 幼稚園』東洋館出版社，pp.6-8
４）文部科学省（2017）『幼稚園教育要領 平成29年告示』
５）厚生労働省（2107）『保育所保育指針 平成29年告示』
６）内閣府，文部科学省，厚生労働省（2017）『幼保連携型認定こども園教育・保育要領 平成29年告示』
７）厚生労働省「社会福祉施設等調査」https://www.mhlw.go.jp/toukei/list/23-22c.html（2020年１月20日閲覧）
８）吉田伊津美，岩崎洋子（2012）「幼稚園における運動指導の実態と教員の運動指導に対する意識」東京学芸大学紀要 総合教育科学系Ⅰ（63），pp.107-113
９）中坪史典（2016）『主体的に遊ぶ子ども－遊びを支える保育者－かえで幼稚園の実践から学ぶもの』エイデル研究所
10）杉原隆，河邉貴子（2014）『幼児期における運動発達と運動遊びの指導－遊びの中で子どもは育つ－』ミネルヴァ書房，pp.31-44
11）池田純子（2018）「主体的な活動を育むための保育者の関わり－５歳児の事例から－」立教女学院短期大学紀要第49号，pp.89-100
12）田甫綾野（2018）「集団保育における課題活動への主体的参加の可能性－保育者のかかわり方を視点として－」玉川大学教育学部紀要第18号，pp.185-199
13）矢澤久史（2007）「指導者の言葉かけが子どものやる気と認知に及ぼす影響」東海学院大学紀要（１），pp.211-217
14）白旗和也（2017）『小学校 新学習指導要領の展開 体育編』明治図書，pp.48-49